

平成 20 年度「質の高い大学教育推進プログラム」(教育GP) 採択

「複視眼的視野を持つ国際的医療人の育成」



海外提携校を活用した 専門家育成のための大学教育 —タイ日合同シンポジウム—



平成 21 年 2 月 22 日 (日)

宮崎観光ホテル 尾鈴の間 (西館 8 階)

目次

1. 医学部長から	池ノ上 克学部長	1
2. コーディネーターから	丸山 眞杉研究担当副学部長	2
3. プログラム		3
4. 開式の辞	菅沼 龍夫副学部長	5
5. セッションⅠ：現状および今後の課題		7
(1) Hugh Nicoll 教授		8
(2) Eric Larson 准教授		10
(3) 林 克裕教授		11
(4) Michael Guest 准教授		12
(5) 鮫島 浩准教授		13
(6) Suvina Ratanachaiyavong 教授		14
(7) Sunton Wongsiri 博士		15
(8) Maliwan Oofuvong 博士		16
(9) 草場 ヒフミ教授		17
(10) Ladawan Proteepchaikul 教授		18
	文部科学省挨拶「宮崎の国際化について」	22
	清水 宣彦	22
6. セッションⅡ：学生の声		26
(1) 石黒 えみ		27
(2) 山下 麻里絵		28
(3) Tharntip Sangsuwan		29
(4) 陶山 真由美		31
7. 昼食		33
8. 学術協定調印式		35
9. レセプション		36
10. 新聞記事		38
11. シンポジウム参加者名簿		39
12. あとがき		42

医学部長から

池ノ上 克

宮崎大学医学部長

本日は、ここ宮崎に皆さんをお迎えして、タイ国と日本との大学教育における第一回国際連携合同シンポジウムを開催できることを光栄に存じます。また、この記念すべき国際的行事の準備に奔走してくださった全ての関係者の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

これまでの数年間、プリンス・オブ・ソンクラ大学と宮崎大学の国際連携は非常に活発に、特に医学部生と大学院研修医の交流プログラムの分野で発展してきました。我々は、海外に身を置くことで、医学の分野における知識や経験を広げさせようと、若手医学生を海外へ派遣することにも力を入れて参りました。そのために、本学医学部の英語科において、独創的な教育システムを構築する機会を得られたことは、大変光栄であります。英語科に所属するメンバーはみな非常に情熱的で、国際的な経験を得たい、広げたいと考える全学部の学生を献身的に支えています。

このシンポジウムのもう1つの大きく画期的な出来事は、我々の連携プログラムが、本年度から看護教育プログラムを含む領域まで拡大されたことにあります。プリンス・オブ・ソンクラ大学の看護学部学部長の **Ladawan Prateepchkul** 教授には、この場を借りて、新しい連携プログラムの開拓に門戸を開いて下さったことに感謝申し上げます。

最後に、この宮崎の地で、このような国際シンポジウムが開催できることに感謝し、今後も2国間の友好的な関係が継続し、繁栄していくことを祈念して、挨拶の言葉とさせていただきます。



コーディネーターから

シンポジウム・コーディネーター 丸山 眞杉

宮崎大学医学部研究担当副学部長（地域連携国際交流委員長）

国際交流、海外姉妹校を活用しての大学教育、特に、国際的に活躍できる人材の輩出を最終目的とした大学教育プログラムの確立が求められています。宮崎大学医学部ではタイのプリンス・オブ・ソンクラ大学（PSU）やカリフォルニア大学アーバイン校と姉妹校協定を結び、臨床実習学生の交換留学や、卒後研修プログラムでの研修医の派遣や受け入れなど、様々な新しい試みを実行しています。

今回、“タイー日 共同シンポジウム”を開催し、PSUと宮崎大学医学部との交流を通じた教育プログラムについて、それぞれの国の教育事情を紹介しつつ、現状における問題点、改善点、そして、今後の可能性について率直に意見を交換する場を設けることが出来ました。更に、シンポジウムには、宮崎地域の他大学や文部科学省の方にも参加していただき、国の考え、他学の経験等も聞くことができ、宮崎における大学教育の発展を図る上で大変有意義なものになりました。この場を借りて、関係各位のご尽力に深く感謝いたします。



プログラム内容

1. 8:50-9:00 開会の辞 宮崎大学副学長 菅沼 龍夫

2. セッションⅠ 現状および今後の課題

○座長：宮崎大学医学部長 池ノ上 克

9:00-9:20 宮崎公立大学における海外提携校を活用した教育の重要性

宮崎公立大学 Hugh Nicoll 教授

9:20-9:40 宮崎県立看護大学における海外提携校等を利用した教育の試み

宮崎県立看護大学 Eric Larson 准教授

9:40-10:00 宮崎大学医学部における教育カリキュラムと海外提携校：

ソンクラ大学医学部と宮崎大学医学部間学生交流の実績と展望

宮崎大学医学部 林 克裕 教授

10:00-10:20 国際的専門家育成のための EMP, ENP プログラム、その教育哲学

宮崎大学医学部 Michael Guest 准教授

10:20-10:40 タイ医学部実習生の受け入れ

宮崎大学医学部 鯨島 浩 准教授

○座長：宮崎大学医学部教務担当副学部長（教務委員長） 片岡 寛章

10:40-11:00 タイにおける医学教育と海外提携校の意義

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部 Suvina Ratanachaiyavong 教授

11:00-11:20 プリンス・オブ・ソンクラ大学における医師のための英語教育

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部 Sunton Wongsiri 教授

11:20-11:40 海外提携校を活用した医学教育の現状と問題点

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部 Maliwan Oofuvong 教授

11:40-12:00 看護学教育における海外提携校の重要性と展望

宮崎大医学部看護学科 草場 ヒフミ教授

12:00-12:20 PSU 看護学部が宮崎大学医学部と提携して行いたい看護教育

プリンス・オブ・ソンクラ大学 看護学部 Ladawan Prateepchaikul 教授

3. 13:30-13:50 文部科学省挨拶「大学の国際化について」

（文部科学省国際統括官付国際統括官補佐 清水 宣彦）

4. セッションⅡ 学生の声

○座長：宮崎大学医学部研究担当副学部長（地域連携国際交流委員長） 丸山 眞杉

13:50-14:10 海外での学習経験と大学教育に対する提言

宮崎公立大学 学部学生 石黒 えみ氏

14:10-14:30 PSU で学んだこと、交換留学プログラムの改善に向けて

東京医科歯科大学 研修医 山下 麻里絵氏

14:30-14:50 宮崎大学医学部で学んだこと、交換留学プログラムの改善に向けて

プリンス・オブ・ソンクラ大学 研修医 Tharntip Sangsuwan 医師

14:50-15:10 海外での学習経験と大学教育に対する提言

宮崎県立看護大学 陶山 真由美

5. 15:20-15:30 閉会の辞 宮崎大学医学部長 池ノ上 克

調印式

司会：丸山国際交流委員長

16:00～ （壇上） 池ノ上医学部長、草場看護学科長

Ladawan 看護学部長、**Urai** 国際交流担当部長

レセプション

進行：丸山国際交流委員長

開会挨拶及び乾杯：池ノ上医学部長

閉会挨拶：菅沼副学長

開式の辞

開式の辞

菅沼 龍夫

宮崎大学副学長

ご来賓の皆様、参加者の皆様、おはようございます。宮崎大学副学長の菅沼龍夫と申します。

まず、ご来場の皆様に、宮崎大学のこの国際シンポジウムにご参加いただきましたことを心より感謝申し上げます。そして、タイのソンクラ大学の **Suvina Ratanachaiyavong** 教授と **Ladawan Prateepchaikul** 教授、ソンクラ大学ご一同の皆様、カリフォルニア大学の副学長には、今回のシンポジウム開催に際し、多大なご尽力を賜りましたことを感謝申し上げます。

宮崎大学を代表いたしまして、「海外提携校を活用した専門家育成のための大学教育」の題目の元に、タイ日合同シンポジウムを開きましたことを、大変光栄に感じております。

このシンポジウムは、文部科学省が行っている「質の高い大学教育推進プログラム」（教育 GP）に採択された「複眼的視野を持つ国際的医療人の育成」大学の専門英語教育プログラムに基づいて開催されました。

宮崎大学とソンクラ大学との国際的な相互提携には、20年以上の長い歴史があります。2005年に、私が丸山教授と一緒にソンクラ大学に行った時、両大学が医学生との交換プログラムを行うことで同意しました。宮崎大学からは、2005年の4月に、1ヶ月の選択的臨床実習にソンクラ大学に4人の医学生を送り、ソンクラ大学から3名受け入れました。このようにして、交換留学プログラムが始まりました。今では、このプログラムは、学部生だけでなく、卒業した医者たちにも拡大してきています。これまでのところ、両大学から約60名の学生と医者が、この交換プログラムに参加してきました。この交換プログラムの拡大に伴い、国際的視野を広げ、外国人と意思疎通を図れるように、学生やスタッフの英語学習を促進する EMP と ENP のクラスが開かれました。

このシンポジウムは、国を越えて相互に友好を深め、国際的連携の重要性を認識し、多面的で国際的な観点を発展させるため、さらに宮崎地域の専門的な大学教育システムの改善に貢献するために、行われます。

宮崎大学の看護学科とソンクラ大学の看護学部が、今日のこのシンポジウムの後に、学生の交換プログラムを行うと合意するという朗報を、この場を借りて皆様にお伝えしたいと思います。そしてこの協定が結ばれることに際し、心よりお祝いの言葉を申し上げます。

最後になりましたが、皆様に、このシンポジウムが成功裏に終わることを祈念いたします。日本語で「一期一会」という言葉があり、お聞きになったことがあるかもしれません。この考えは、伝統的な日本のお茶の席で、「1つ1つの出会いを大切にせよ、なぜなら2度とないものであるから」という意味です。今後も、国際的連携の拡大とこの連携が継続していくことを期待しています。

御清聴ありがとうございました。どうぞよい1日を。



セッションⅠ：
現状および今後の課題

宮崎公立大における海外携帯校を活用した教育の重要性

Hugh Nicoll 教授

宮崎公立大学

はじめに

宮崎公立大学は、1993年に開学しました。学部は人文学科という1つの学科で構成され、学士と同等の資格が得られます。ほとんどの学生は、人文科学を専攻していますが、なかには、教員免許を取得する学生やITコースの技術を伸ばし、コンピューターのプログラマーやシステムエンジニアとして就職していく学生もいます。私たちは、絶え間なく変化する経済の需要にあった学生の育成に焦点を当て、大学開学当初から、言語学習や国際交流プログラムを重点的に行ってきました。その結果、私どもの大学のかんりの学生が、第二、第三言語である英語、韓国語、あるいは中国語の能力を伸ばしてきています。

今日、私たちは、4つの機関と活発な交流を行っています。(以下の表1を参照)

大学	場所	協定を結んだ年
蘇州大学	中国、蘇州	1995
蔚山大学校	蔚山、韓国	1995
ワイカト大学	ハミルトン、ニュージーランド	2000
マラスピナ大学	ナナイモ、ブリティッシュコロンビア、カナダ	2004

表 1: 宮崎公立大学 国際交流協定関係

私たちは、マラスピナ大学とはほぼ一方的ですが、蘇州、蔚山、ワイカト大学とは、相互に交流関係を維持しております。蔚山と蘇州の場合は、宮崎公立大学の学生グループが、韓国語や中国語能力を伸ばすために、交流協定のある大学キャンパスに行きます。また、交流協定のある学校からは、第二言語としての日本語集中コースのために、学生が宮崎に来ます。これらのスタディツアーは、だいたい3週間行われます。私たちはまた、交流協定のある機関と宮崎公立大学の学生2名に、相互の年度交換プログラムを行っています。ワイカト大学の場合は、宮崎公立大学の学生は、1999年以来、ニュージーランドでの4週間のプログラムに参加しています。2000年に交流協定を結んでから、宮崎とハミルトン間で相互の交流により、ほとんど年に1人の学生を年度毎にサポートすることになりました。マラスピナの場合は、宮崎公立大学の学生グループは、3週間のスタディツアーのために、2005年以来毎年訪問しており、また、2005年から2008年にかけて毎年宮崎公立大学から学生が1人、4ヶ月のEFLプログラムに参加してきました。

プログラムの目標と結果

私たちは、相互に関わりのある目標をいくつか念頭において、国際交換協定を発展させてきました

- 学生交流の促進
- 学生に、言語学習と異文化間適応力を伸ばすための動機を高める
- 国際的な気づきや国際的な友情を築く
- 交流協定のある機関や受け入れてくれる自治体とともに、学術的かつ文化的交換を促進する

私たちの行うプログラムの結果は、おおむね良好で、学生の外国語学習の動機を向上させ、対個人での外交のすばらしい機会となり、文化の違いに対して寛容になるという結果をもたらしつつあります。これらのプログラムは、宮崎公立大学で、学生の間で「できる」という文化を生み出すことに貢献してきています。宮崎公立大学では、たくさんの学生が、海外体験を教育の自然な一部として、また国際的な視野を持つ市民としての成長に恩恵をもたらすものとして見ています。また、学生は、海外交流体験を卒業後の厳しい就職活動への準備になるととらえています。これらのプログラムは、日本或いは海外で、国際的な企業での雇用や大学院への進学準備としても役に立つものです。「できる」文化がもたらしたある重要な側面があります。それは、多くの学生が、卒業前に休学することによって、或いは就職戦線に入る前に学習体験を得るために旅行することによって、自主的に海外の言語プログラムに参加しているということです。

私たちが行っているプログラムには、2つの短所があると指摘されています。それらは、次のとおりです。

- ・ 学部の交換契約は、大部分が、十分に実行されないままに終わっていること
- ・ 訪れる交換学生のための、第二言語としての日本語プログラムはまだ、発展途上にあること



さらに、大学経営管理上、そしてカリキュラムの分野で、継続的に配慮しながら、議論を行っていかなければならないことが多くあります。

- ・ 海外で取得した大学の単位の移行、独立した学習プロジェクトのための代替評価スキームに関する手続き
- ・ 海外で学習する学生のためのコミュニケーションと支援サービス
- ・ 本学における過酷な時間配分と労働量、つまり、教職員の休憩時間の問題
- ・ 学習者の自立、学部の発展、異文化適応能力の学習と教授の統合的支援の改善
- ・ 生涯教育と伝統的な教室設定の中、あるいは外での「新しいリテラシー」の教育学の統合

これらすべての分野は、地方的、地域的、そして国際的な連携を行いながら、努力を組み合わせることによって、取り組むことができ、成果を挙げることができると、私は信じています。

参考文献

Allford, D. and Pachler, N. (2007) Language, Autonomy and New Learning Environments, Oxford: Peter Lang.

Raya, M. J. and Sercu, L. (2007) Challenges in Teacher Development: Learner Autonomy and Intercultural Competence, Oxford: Peter Lang.

宮崎県立看護大学における海外提携校等を利用した教育の試み

Eric Larson 准教授

宮崎県立看護大学

【要約】

宮崎県立看護大学（MPNU）の小史は、本学で開講されている国際的要素を含む科目により示すことができる。

本学で実施されている3つの特別国際プログラムは、以下内容で構成されている：

1. 留学希望者のための育英事業（2004）
2. 大学間交流プログラム（2004）
 - チェンマイ大学看護学部
 - 梨花女子大学健康科学大学看護学科
 - 西安交通大学看護学部
3. 特別海外研修プログラム（2007）

3つの特別国際プログラムが掲げる目的を達成するために、本大学が重要だと主張している点は、学生によるプログラム枠組み作りへの参加である。本学では、学生のニーズに合わせた協定校との教育交流と、プログラムのオーダーメイド性に焦点を当て、本学のカリキュラムにおいてもまた、長く議論を行っている。

最後に、教育内容と外国人との交流に焦点を当てた国際プログラムを通して自己分析をするという考えは、本学における最終的な教育目標の中に組み込まれている。本学ではその目標を、個々の患者毎に質の高いケアを提供するために、患者をより理解できるプロの看護師になることとしている。



宮崎大学医学部における教育カリキュラムと海外提携校： ソクラ大学医学部と宮崎大学医学部間学生交流の実績と展望

林 克裕 教授

宮崎大学医学部

宮崎大学医学部における学生交流プログラムの現状と今後の研修医交換プログラムについてご説明します。



- 1) 宮崎大学医学部では、まず一般教養科目を学んだ後に、基礎医学（解剖学、生理学、その他）を学びます。それから（消化器系、循環器系、その他）などで構成される臓器関係の臨床医学の講義が開始されます。最終的に 4 年次の最後には臨床実習開始前の共通試験（CAT : Common Achievement test）を受けなければなりません。
- 2) CAT : USMLE（米国医師資格試験）step1 に対応し、2004 年から開始され、Computer based test (CBT) と客観的臨床能力試験（OSCE : Objective Structured Clinical Examination）の 2 つがあります。CBT は医学生医学知識を、OSCE は医学生の基本的な臨床技能と態度を評価します。
- 3) 臨床診療：臨床実習は bed-side learning（BSL）と clinical clerkship（CC）の 2 つに分けられます。
 - a) BSL は、本学附属病院内にある 20 の外来で 36 週に渡って行われます。これらは病歴聴取、身体検査、臨床技術習得の 3 つのカテゴリーに分類されます。
 - b) CC も同じく、附属病院で 16 週に渡って行われます。プリンス・オブ・ソクラ大学（PSU）も、外部診療科の 1 つとしています。PSU における臨床診療は、本学 CC の 1 部として、4 週間の日程で 2005 年から実施されています。
- 4) 学生交流プログラムの現状：初年度に 4 人の学生が PSU で学びました。留学生数は、年々少しずつではありますが増加しています。昨年は 8 人の学生が PSU で学びました。一方、2005 年には PSU からの学生が 4 人、本学で学びました。そして海外からの学生数は 8 人へと急伸したのです。この学生交流プログラムは、本学学生に 4 つの大きな影響を与えています。
 - a) 医学知識：デング熱、マラリア、HIV 感染とサラセミア（地中海貧血）といったタイ特有の疾病の多くを実際に目にすることができます。
 - b) 医療技術（医療英語および医療行為）：医学英語と医療行為における成長は目を見張るものがあります。医学生がタイで関われる医療行為の制限は、日本に比べ緩やかです。彼らは日本の研修医と同様の医療を行うことができます。そして、PSU の学生と一緒に医療行為に参加することができます。
 - c) 学生動機づけ：学生のやる気を促進するプラスの効果があります。これは学生交換プログラムで最も重要効果と言えるでしょう。PSU の学生は、高い医学知識と医療技能を持ち合わせているだけでなく、高い意欲も持っています。それが本学学生の意欲を刺激し、熱心に勉強に励むようになっています。
- 5) 研修医交換プログラム：医師免許取得後、研修医は必須の 7 科目と選択科目の両方を 2 年間選択しなければなりません。この研修コースは、本学附属病院と外部診療科の 1 つである PSU で実施されています。そこでは選択科目の 1 つを取得することができます。PSU における臨床研修は、2008 年から開始されており、選択科目の 1 部として 4 週間実施されています。

学生交流プログラムは、このように素晴らしい効果を生んでいます。今後研修医交換プログラムに期待されるのは、1) 医療保険に関する見解、2) 医学教育研究、3) 基礎および臨床医学研究の 3 つではないでしょうか。

国際的専門家育成のための **EMP, ENP** プログラム、その教育哲学

Michael Guest 准教授

宮崎大学医学部

宮崎大学医学部英語分野准教授のマイケル・ゲストは、EMP プログラムの 1 部である英語教育に関する基本的な哲学についてプレゼンテーションを行った。ゲストは EMP プログラムの重要性はアクティブな英語教育だけではなく、自学の機会を与えることだと強く語った。これは、学生に有意なコンテンツベースのタスク、学生の語彙選択のコントロール感や責任感、そして、英語でのプレゼンテーションや学術論文、ポスターセッションの準備や集中したリアルタイムの英語での指導といった道具的目標を提供することにより達成される。そして、外国語が最も良い状態で吸収された時、学生が第二言語で積極的に内容（この場合は医学内容）に取り組む時、つまり、言語は、ただ単に言語を学習するのではなく、明確な目標や目的を持ち、目標言語を使用する過程を介することで習得するのであると論じた。生きた言語は、生きた患者の身体に形容される一方で、伝統的な「学習」は、解剖学の授業で死体を学習するものと形容された。

ゲストはまた、科学者が新しい環境に彼ら自身をさらけ出すことによって仮説の検証を行うのと同様に、第二言語力への検証や挑戦をすることが学生にとっても必要だと指摘した。言葉によってコミュニケーションをとることは、彼らが必要としている言語の形式への意識を高め、それが成功したとしても、あるいは、失敗に終わったとしても、これらの気づきは、文法、専門用語、あるいは語法を敢えて教えなくても、英語教師からの助言で高まるとゲストは考える。



タイ医学部実習生の受け入れ

鮫島 浩准教授

宮崎大学医学部

【要約】

1. 3年前から、プリンス・オブ・ソンクラ大学から合計8名の医学生と3名の医者を受け入れ、それは有益で、実りの多い実績を残している。
2. 留学生のための教育システムを作るために、産婦人科、新生児医療やEMP（医学・看護英語）への参加といった多くの専門分野との連携採用している。
3. 3つの臨床科の中で、いわゆる、提供されている多層化した教育には、教員や担当主任医師、3名から5名の医師、2名から4名の医学部生がおり、交換留学生は、宮崎大学の医学部生が学んでいるように取り組んでいる。そして、医学教育システムのために5名の顧問医師が応対している。
4. 3つの臨床科の通常業務
 - 1) 主任医師の指揮のもと、すべての科でグループ会議が朝夕2回行われる。
 - 2) 興味深いケースは、すべての教育担当のスタッフや医学部生が平日に参加する朝礼会議で話し合いが行われる。
 - 3) 産科：分娩前と分娩中の高リスク妊娠例
 - 4) 婦人科：腫瘍学、泌尿・婦人学、化学療法、放射線治療、不妊症、婦人科手術
 - 5) 新生児医療：極度の未熟児、新生児外科、新生児心臓病学、高リスク新生児



タイにおける医学教育と海外提携校の意義

Suvina Ratanachaiyavong 教授

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部

Bhumipol Adulyadej 国王陛下のお尊父であられる、ソンクラの Mahidol 殿下のお知恵に授かり、Pattayakorn 医学学校と名付けられた、タイで最初の西洋医学学校が 1890 年に創設され、後に、Siriraj 病院の医学部となりました。現在、私立の学校 1 つを含む 18 の医学学校があり、地方ベースの家庭医の数を増やすために、数多くの厚生省との提携プログラムがあります。

タイの元来の医学教育は 6 年で、予備医学、予備臨床、そして臨床学習として 2 年、それから、交代制のインターンとして、さらにもう 1 年あります。医学免許は、タイの医学総会議 (GMC) によって、タイの医学校連合 (COTMES) による質基準とともに、授与されます。



第 3 回の全国経済教育発展計画 (1972 年から 1976 年まで) に従って、プリンス・オブ・ソンクラ大学の新しい医学学校は、1972 年に設立されました。従来の、初期にコミュニティで臨床に晒されることが中心であった独特のプログラムである 6 年の医学学習は、後に、5 年間の医学学習 (1 年間の一般教育と 2 年間ずつの予備臨床と臨床学習) となり、1979 年の全国医学カリキュラムの変換に合致する 1 年間の学外研修が追加されます。学習者中心の戦略である問題志向型 (PBL) の概念が、1988 年にソンクラ大学に導入されました。2 年後には、予備臨床の授業において、各学期の終わりに、問題解決型授業による 2 週間の教育が行われるようになりました。問題解決型プログラムへの継続的なカリキュラム改善が、1996 年によく始まり、1999 年には、完全に行われるようになりました。学科は、機能的組織システムと問題解決型授業に統一されました。一般的に、学生は少人数のグループ学習とディスカッションに 30%の時間を使い、自主学習のために 40%の時間が充てられます。大クラスの講義と指示を行う実験演習のための時間配分は、15 から 20%に、或いは 10 から 15%にそれぞれ減らされました。予備臨床学習の間、1 週間に 1 度、学生は臨床基礎演習のために午後の 1 セッション (2、3 時間) を使い、コミュニティの家族を訪問するか、医療倫理について少人数でディスカッションを行います。基礎と臨床科学の統合は、臨床推論能力チュートリアル (CTR) を使って、臨床レベルで継続して行います。セッションは、概して、科学的根拠に基づく医療 (EBM) に、臨床推論能力、決断、そして倫理を組み合わせた PBL 形式で行います。

プリンス・オブ・ソンクラ大学の理念と価値は、まずコミュニティを中心とした医学教育、統合された問題解決型、テクノロジーサポート型、国際化と生涯教育を伴う学習者中心、PSU の卒業生に求められる次の 9 つの能力との組み合わせに置かれています。その 9 つの能力とは、プロの知識と技術、プロの倫理と姿勢、臨床的評価と問題解決スキル、自発的な生涯学習スキル、コミュニケーションと情報技術、コミュニティに対する認識と配慮、チームワークスキル、マネジメントスキル、そして最後に社会生活スキルです。私たちは、学生に幅広い世界でどのように生き残るかについて学ぶ機会を提供し、学生の将来に向けての研究や連携について考え、海外の学生と人間関係を築き、彼らの国に対して新たな視点を発展させられるようにしていかなければなりません。

このような理由から、私たちの医学的、生物医学的研究において、継続的な質の高い改善 (CQI) のために、国際的なコラボレーションは非常に重要だといえます。

プリンス・オブ・ソンクラ大学における医師のための英語教育

Sunton Wongsiri 教授

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部

プリンス・オブ・ソンクラ大学 (PSU) 医学部では、附属病院における構想を定めました。その方向性とサポートシステムは、英語を基礎とし、それを基に構築しなければならないとされています。臨床研究前の医学部1年生から3年生では、それぞれの学年で、英語による問題志向型学習 (PBL) を行うグループが2~3あり、そこで学生達は英語によるディスカッションを行っています。グループはそれぞれ8人から9人の学生で構成されています。学業以外の活動では、学生のモチベーションを上げるための English キャンプや English Day があり、英語によるコミュニケーションを取れるような内容になっています。夏に実施される English キャンプは、学生が英語教師ボランティアと5日間を過ごす内容となっています。参加できる英語教師の関係から、夏の限られた日程でしか実施できませんが、学生達はこの5日間を通して、英語学習だけでなく、有益な活動を体験することができます。English Day は、ゲームやアクティビティを終日英語で行うことにより、英語を使うという意識を刺激する内容となっています。4年、5年、そして6年生は臨床研究を行います。各診療科によっては英語で授業が行われるものもあります。整形外科部門では、臨床教育、病棟回診、講義や人員配置法の授業のいくつかで英語による指導が行われています。



学生だけでなく、研修医や看護師、医療スタッフ全員にもまた、英語教育における支援が行われています。英語クラスは誰でも参加でき、これらの有益な支援が英語を使う環境作りの重要な鍵となっています。

最後に、学生は、英語のコース、プログラム、そして英語を使うきっかけとなる環境を必要としています。英語を使うこと、それは学生達の才能を維持し続けるために必要なことです。EMP プログラムは、英語によるコミュニケーションを成功させるための、最も重要な鍵の一つであると言えるでしょう。



海外提携校を活用した医学教育の現状と問題点

Maliwan Oofuvong 教授

プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部

2006 年から 2008 年までのソンクラ大学での宮崎大学の学生の体験

基本的に、交換留学生は、ソンクラ大学病院で 3 週間、コミュニティ病院で 1 週間、働くことになっており、さらに 1 ヶ月の選択期間があります。

1. 一般的な病気、使用される薬、診察過程について学ぶ
2. TB や HIV、類鼻疽といった稀な症状について学ぶ
3. 診察と思考段階をどのように関連づけるかについて学ぶ
4. 朝の巡回と PSU スタッフによる講義に出席する
5. 管理者の指導のもとで治療を行う
6. 医学システムと医学教育の違いについて学ぶ
7. コミュニティ病院での体験や異なる症状について学ぶ
8. タイのコミュニティ病院の医学システムについて学ぶ
9. タイの人々とどのようにコミュニケーションを図るかについて学ぶ
10. 日本とタイの文化やライフスタイルについての違いや類似点について学ぶ



問題点とプログラム改善のための提案

1. 病院の全職員に、朝の巡回、ベッドサイド巡回、症例についての話し合いで、特に交換留学生が近くにいる時は、英語を話すように促進する。
2. 学術的な活動の場合も、そうでない活動の場合も、交換留学生にアドバイスと通訳のための案内役として、医学生をつける。
3. 滞在施設と選択の部門別のスケジュールについて、早めに情報を提供する。
4. 交換留学生のために、徹底して適切で学術的な活動を取り計らう。
5. PSU 学生ガイドブックを改善する。

プログラムの限界

1. PSU の職員（学生、医師、看護師）と交換留学生との間に、英語の壁があること
2. 交換留学生とタイ人患者との間に、言語の壁があること
3. 実習に限界があること。すべての医学的施術を管理者の指導のもとで、行わなければならない
4. 交換留学生に提供する選択分野が限られていること
5. 提供者（医師）と受け手（交換留学生）との間で、プログラムの目的に関して、誤解が生じていること

看護学教育における海外提携校の重要性と展望

草場 ヒフミ教授

宮崎大学医学部看護学科

1. 日本の看護システム

日本の基本看護教育

資格取得のためのコースオプション

専門の看護資格

正看護師、保健師、助産師、准看護師

上級の専門家

認定看護師、専門家



2. 宮崎大学医学部看護学科

1) 学部コース

看護学科は、人間性豊かで寛容な心を持った専門家や、成長する先進医療福祉システムのニーズに対応できる専門家を育てることにより、人間の健康、福祉、そして看護技術を発達させることを目的としています。

2001年4月、医学部看護学科設立

2005年4月、看護学科修士課程設置

2009年4月、ガン看護のための認定看護師コース開始予定

2) 修士課程（看護学）

看護学修士課程は、患者の生活の質を向上させるために、学生の技能をさらに発達させることを目的としています。全ての生命に対し尊敬の念を払うことを基礎とし、上級技術を使って問題を解決する上で、批判的に看護技術を追求することができる人物を育てます。

3. 国際交流における目的と方針

1) 教育における国際連携

教育目的： 1) 国際的観点での社会貢献能力の習得

2) 実習、教育、研究による看護学発展のための能力育成

このように、宮崎大学医学部看護学科には、学生交流と学術交流の双方において、プリンス・オブ・ソングラ大学医学部やカリフォルニア大学アーバイン校での教育プログラムを有しています。

2) 海外における看護発達への貢献

看護学科では、海外の保健職員の育成に貢献することにより看護分野の国際連携を促進します。国際的活動の一つとして、JICAの地域集中訓練コースである“中東諸国における女性の健康と妊婦と子供の健康支援”があります。これは4週間にわたって実施されます。

3) 国際学術連携

国際的な学術連携を開始予定です。主な活動としては、研究者の交換、研究分野での国際連携、そして国際会議があります。例えば、東洋における看護技術の検証と発達、健康増進などです。

我々は国際的な学術交流における成功を信じています。

PSU 看護学部が宮崎大学医学部と提携して行いたい看護教育

Ladawan Prateepchaikul 教授

プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部

プレゼンテーションの概要

1. プレゼンターと PSU 看護学部訪問団の紹介
2. タイの看護教育
3. PSU 看護学部の歩み
4. PSU 看護学部の現状
5. 国際協定
6. 宮崎大学との協定について

プレゼンターと PSU 代表の紹介

以下の看護学部、看護部の看護師、医学部から 3 人の教授

- ・Ladawan Prateepchaikul 准教授：プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部学部長
- ・Urai Hatthakit 准教授：調査国際協力課副学部長
- ・Wongchan Petpichetchain 准教授：看護科学修士・国際プログラム委員長
- ・Somsamai Suteerasarn 博士：医学部看護学部婦長



タイの看護教育

看護カリキュラムを提案している教育省管轄の大学拡張プログラムにおける看護学部だけでなく、看護カリキュラムを提案している保健省、防衛省、そして内政省管轄の看護大学がある。そして、これらの看護大学は教育省の管理下におかれ、同様の教育管理システムを使用することが義務付けられている（写真 1）。

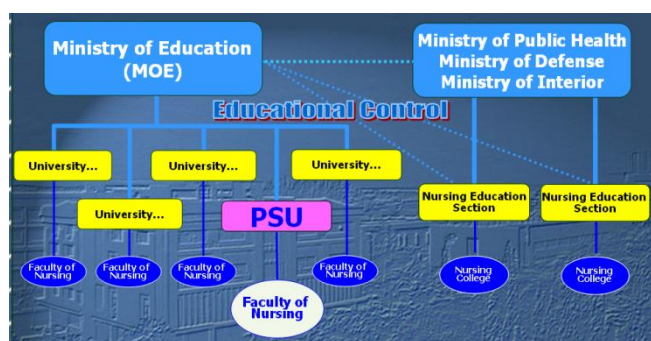


写真 1：教育省、保健省、防衛省、内政省による国家教育の教育管理

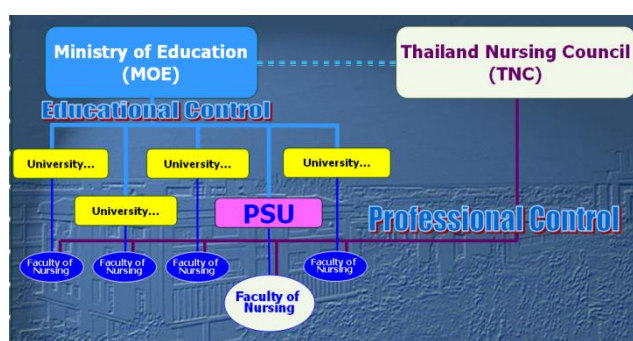


写真 2：教育省及びタイ看護議会の看護教育の専門的な管理

看護教育における質と専門管理

これらすべての看護教育機関は、これらの看護大学の教育サービスをタイ看護議会や TNC によって定められた専門的基準に順応させ、また、これらの看護大学は TNC によって認定されなければならない（写真 2）。

TNC は看護教育の整備、看護学科の教員、大学のスタッフを 5 年おきに認定することになっている。

PSU 看護学部の歩み

PSU 看護学部は、1973 年に医学部の下に看護学科として設立された。タイでは、ほとんどがこのモデルを採用している。多くの看護学校が医療関係機関の下で設立され、後に分離し、独立した固有の機関となった。プリンス・オブ・ソンクラ大学の看護学部の設立と発展は、次のようにまとめられる。

1973 年、初めに 3 年制の学位プログラムとして実施された。

1974 年、4 年制の学士号プログラムにするために看護教育のレベルを上げる方針を取ったが、当時、それは新しい試みだったため、看護知識の主体そのものが不明確で確固たるものではなかったため、教えられていた内容は、ほとんどが他の学科から借用されたものであり、授与された学位は理学士号であった。

1980 年 10 月 7 日の学科誕生を祝い、この年以来、毎年誕生祭を祝っている。

我々は学士号の取得が可能な 3 年間の認定看護師コースと、2 年の専門看護コース 2 つの継続教育プログラムを 1986 年と 1987 年に開始した。これは、彼女たちのキャリアアップに役立つものとなり、看護師のレベルを向上させるという政府の方針にも一致している。1 年プログラムがおおよそ 3 回に分けて提供されており、必要がないと感じられればそのプログラムは終了となる。しかし、2 年プログラムは現在開かれていないが、より長い間運営されていた。

翌年の 1988 年に、他の医療従事者と我々が育成する専門家との区別を明確にするために、理学士から看護学士へ移行した、新たに改訂された認定プログラムを実施した。看護学は、実践、人道主義的徳徳であり、医療に関する徳徳と知識を共有する独特な体系を持っている。それ以来、看護学士の学位を授与してきており、カリキュラムも 5・6 年ごとに刷新してきている。

修士号、博士号を持っている高い教育を受けたスタッフが準備をしながら、ベースとなるカリキュラムに懸命に取り組んだ後、1990 年に我々は看護修士のプログラムを提供するに至った。

同年 (1990 年) に、我々はタイにある他の看護学部 (Mahidol 大学、Chiangmai 大学、Ramathibodi 看護学部、そして Khon-Kan 大学など) と共同で、タイにおける最初の看護学博士課程の設立に着手した。このよう共同して作業することは、特に教育を提供する人材を共有することによって、当時、国内で必要とされていた博士予備課程の数を、急速に進展させることができた。数年後には、各大学における学生の受入れ人数も増加し、大学独自の博士コースの開設にもつながった。

1998 年、看護学修士の国際プログラムは始まった。このプログラムは既に 10 年間運営されており、これまでに 2 度のカリキュラム改訂が行われている。我々はインドネシア、マレーシア、ブータン、中国、そしてバングラデシュからの学生を受け入れている。1998 年以来、国際プログラムや多くの博士予備課程を運営してきているので、今以上のプログラムを提供する準備ができています。これらのプログラムは博士課程の国際プログラムや国際短期訓練プログラムを含んでいる。我々はまた近隣国や西洋諸国との国際共同をより入念に作り上げてきている。

PSU 看護学部の現状

現在、PSU には内科、外科、小児科、地域医療科、産婦人科、精神衛生及び精神看護科、看護事務科の 7 つの専門的な学科が設けられており、127 名の教育スタッフがいる。そして経営、財務、学務すべてを扱う 15 の支援部署がある。

また、高齢者の健康促進のための高齢者保健センター、幼稚園に入学する前の子供の世話をする小児発育センター、そしてホリスティック・ヘルスや東洋の英知のためのセンターを含む 3 つのコミュニティーサービスがある。

現在 PSU で提供されているプログラムは、

- 1) 学部 : 4 年制
- 2) 看護科修士課程 : 2 年制
 2. 1) タイ・レギュラープログラム
 2. 2) タイ・スペシャルプログラム
 2. 3) 国際プログラム
- 3) 理学修士課程 : 2 年制 (保健制度研究)
- 4) 医学博士 : 3 年制 (インターナショナル)

これらのプログラムが提供しているものに、看護学士プログラム、看護学修士課程、通常の勤務日に行われる（月曜から金曜）タイプログラムがある。また、週末に「特別プログラム」と呼ばれるコースを設け、看護師に勉強の機会を提供している。そして、国際色豊かな修士課程もある。これら3つのプログラムのために、成人看護、小児看護、助産術、看護協会、精神衛生及び精神看護を含むいくつかの看護専門の分野を実施している。

修士課程には、理学修士もあり、これは保健システム研究を専門とする。修士課程では、この分野での公衆衛生の人材養成における政府の要求に応えることが求められてきている。最終的な公式学位は、博士課程となる。

また、国際的な短期研修も充実しており、これらのほとんどが我々と共同連携している教育機関のニーズに合致するよう提供されている。

提供されている短期研修コース（6～16週間）

- 1) 感染症、小児看護
- 2) 救命救急看護（タイ・国際プログラム）
- 3) 老年看護
- 4) 緊急及び外傷看護
- 5) 看護学教育
- 6) 精神衛生及び精神看護

国際協定

プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部は、看護教育施設間の学術協定を重視する。その理由として、全体の教育・研究・臨床実習・専門看護の強化に役立つからである。各教育施設は分野別による強み、専門性を備えている。知識や経験や人的・物的資源を共有することで、お互いに利益を得ることができる。また、両者間で等しく恩恵を受けられない場合であっても、相互に助け合うことこそが重要だと考えている。このように、お互いが関わり合うことで、我々はいつでも満足を得ることができる。

看護学部は、西洋・東洋両方の多くの国々と活動的な協定を結んでいる。アジア地域では、バングラデシュ、中国、インドネシア、マレーシアと協定を結んでおり、西洋諸国では、アメリカとオーストラリア、そして今回、宮崎大学とも協定の運びとなる（写真3）。

アメリカ：

- ーフロリダ・アトランティック大学
- ーミズーリ・コロンビア大学
- ーテキサス健康科学センター大学ヒューストン校
- ーテキサス女性保健大学ヒューストン校
- ーカリフォルニア大学サンフランシスコ校

中国：

- ー昆明（クンミン）医科大学
- ー山東（シャントン）医科大学

インドネシア：

- ー北スマトラ大学
- ーシアクラ大学

バングラデシュ：

- ー看護理事会・バングラデシュ看護委員会

マレーシア：

- ーマレーシア理科大学

写真3：



協定分野：

- 1) 職員交換
 - ・視察訪問
 - ・研修：大学院・短期プログラム
- 2) 交換留学
- 3) 共同研究

宮崎大学との協定に関して

宮崎大学医学部看護科とプリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部との協定にあたり、以下が可能性としてあげられる。

- 1) 交換留学
- 2) 職員交換
- 3) 共同研究
- 4) 専門家、資源、情報の共有
- 5) 教育、研究、文化的・社会的活動の連携の促進
- 6) 他の学術的な活動（セミナー・学会・ワークショップなど）

宮崎大学とプリンス・オブ・ソンクラ大学は、まだ大学協定の調印を済ませてないが、大学間では多数の交流が行われている。例えば、2008年の10月に2週間、宮崎大学看護学部の学生1名、2008年の草場ヒフミ教授率いる看護学科・看護部スタッフ数名の視察訪問受け入れなどである。現在、宮崎大学の看護学科とプリンス・オブ・ソンクラ大学の看護学部は、2010年の4月8日から10日までタイのプーケットで開催される「2010年国際学会：看護学・看護技術の多様性と原動力」という国際会議の準備を共同で行っている。今後とも、宮崎大学看護学科とプリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部の交流が盛んに行われ、未長く続くことを願っている。



文部科学省挨拶「宮崎の国際化について」

清水 宣彦

ユネスコ国内委員会 事務局長補佐
文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

はじめに、このようなすばらしい国際シンポジウムが開催されましたことを、心よりお祝い申し上げますとともに、このシンポジウムにお招きいただき、発表する機会をいただきましたことを大変光栄に存じます。

私は文部科学省国際統括官付国際統括官補佐の清水宣彦と申します。私どもの部門は、ユネスコの担当でありますので、ユネスコ国内委員会の事務局長補佐も兼任しております。

本日は、日本の大学の国際化について、説明させていただきたいと思います。私は、高等教育指針の専門家ではありませんが、私が現在、業務を行っているユネスコの観点から、そして東京大学の国際部門で3年間部長を務めた経験から、この題目についてお話しさせていただきたいと思います。

本発表は、次のように進めていきます。まず、日本の大学の国際化の背景、次に、政府レベル、大学レベル、学部レベルなどにおける国際化にむけての取り組みについてお話しします。3番目に、ユネスコのプログラムのような国際機関との連携の可能性についてご紹介します。宮崎大学と本日ご参加いただいている諸大学の皆様は、国際化に向けてご尽力のことと思いますので、私の発表が、皆様のお役に立てれば、光栄に思います。



I. 国際化の背景：国際化/ 国立大学の法人化

最初に、大学の国際化の背景について、私の基本的な考えについてお話しします。国際化によって、地球規模で人類が緊急に解決しなければならない昨今の課題、すなわち、環境の悪化、食物自給率の低下、経済や福祉問題といった課題があります。国境を越えて行われる絶え間ない人々や物の流れは、教育や研究の国際化を促すものです。人との交流は、年々増加してきています。同様のことは、大学でも起こっています。学部メンバー、研究者、学生は、より興味をひく教育や研究環境の知的連携を求め、世界中を駆け巡っています。

大学の国際化を促すもう一つの要素は、国立大学の法人化です。国立大学は、2004年4月1日に法人化されました。法人化によって、国立大学は、政府の組織化された枠組みから外れ、独立性と自治性が広がることになりました。



法人化は、国立大学の教育と研究の質の向上、個性に富んだ大学作り、競争的環境の中で、人々や社会の期待に応える役割を果たす、という目的のもとに行われました。この使命を実現させるために、中間目標と計画が策定されました。21世紀において、国立大学、公立、私立大学は、「創造と学術的知識の受け渡し」に責任があり、非常に重要な役割を担っています。この背景から、日本のたくさんの大学が、それぞれの目標や計画において、国際化を優先事項に挙げているのです。国際化は、大学の将来に向けての改革において、重要な要素となっています。

II. 国際化への取り組み (1)

それでは、次に国際化への取り組みに移りましょう。国際化に向けて、様々な取り組みが行われています。文部科学省は、大学による様々な改革に向けての取り組みを支援する必要があります。国際化は、大学改革と密接につながっています。この点において、文部科学省は、スライドに見られるようなプログラムを提供しています。

これらのプログラムは、直接的あるいは間接的に国際化につながっています。例えば、「大学教育促進プログラム」がありますが、これは、学生と学校の職員の海外派遣や海外の大学との積極的な協力などを通して、更なる国際的な大学教育に向けての取り組みを支援するプログラムです。GPプログラムというものもあり、この国際シンポジウムも GP プログラムの予算によって、開催されたものだ聞いております。

文部科学省は、GP プロジェクトの結果が、外部や社会などに見える形で残される事を強く願っています。

文部科学省のほかにも、JICA や JSPS、JST、国際交流基金など、さまざまな組織や団体が大学の国際化に向けてのプログラムを行っています。



国際化に向けての取り組み (2)

各々の大学がそれぞれに、国際化に向けて取り組みを行っています。その取り組みが、数値的にも、実質的にも、学術的交換協定を促進する結果となっています。優秀な学生を得るため、そして学部との交換を奨励するために、海外事務所や拠点を開設しています。大学にとっては、学内の国際化を促進するのと同様に、海外の大学や機関と協力することも大切です。

大学内の国際的支援サービスの環境を改善しています。運営スタッフの英語力を向上させるための訓練やより多くの書類を他の言語へ翻訳すること、留学生や外国からの研究者が居住できるための準備など、大学での組織的協力システムの改善と強化を行っています。

インフラの改善によって、留学生や外国からの研究者らが、大学で遭遇する困難を最小限に抑えることができ、楽しく快適で、国際的、教育的、かつ研究にふさわしい環境を大学内に提供することができます。

国際化に向けての取り組み (3)

大学の国際化に向けて、その他の可能性についてご紹介します。それは、大学の国際的連携を利用することです。いくつか例をご紹介します。

IAU は、世界的な高等教育機関の組織です。世界に 609 のメンバーがいるこの機関に 43 の日本の大学が参加しています。これは、会議や会合、情報サービス、方針に関する協議、研究や出版などを含む、将来を視野に入れた共同活動を提供します。

APRU は、環太平洋にある 42 の主要な大学や研究機関の団体です。APRU は、教育の促進、研究と事業を目的としており、それによって、環太平洋地域の経済的、科学的、文化的発展に寄与されます。6 つの日本の大学が、この共同体に参加しています。

AEARU は、東アジアで研究中心の大学の学長のフォーラムを行うことと、地域の主要な大学間で相互交流を行うことを目的としています。17 のメンバーのうち、6 つの日本の大学がこの団体に所属しています。

これらの提携を通して、大学は学長会合や学術交流、研究協力、情報交換、研究シンポジウムやセミナーなどの機会を設けています。

III. 国際機関を通じた協力

大学の国際化におけるその他の側面は、国連や国連機関などの国際機関の利用です。このプレゼンテーションでは、ユネスコプログラムとの協力の実践を取り上げたいと思います。

ユネスコは、国連機関の一つです。今日、ユネスコはアイデアの宝庫として、また、最近台頭している倫理問題について、世界的同意を確立するための基準設定機関として機能しています。簡単に紹介すると、ユネスコは、教育、科学、文化、コミュニケーションの分野において、193 のメンバー機関と 6 つの準メンバー機関で、国際的協力



を推進しているのです。

日本の大学が利用している、高等教育に関連する3つのプログラムがあります。すなわち、1) UNITWIN ネットワーク、2) UNESCO CHAIR、3) ユネスコアソシエートスクールプログラムによる持続可能な発展のための教育です。



ユネスコとの協力

UNITWIN とユネスコチェアプログラムの概念は、高度な研究の実行、大学間ネットワークの構築による高等教育のプログラム開発、国境を超えた知識の受け渡しを通じた大学間協力の推進を行うことです。

(1) UNITWIN

UNITWIN とは、大学が寄り合い、ネットワークを結ぶことを意味します。ユネスコは60のネットワークを完備し、そのうちの3つが日本の大学にもあります。

(2) UNESCO CHAIR

UNESCO CHAIR に関連して、世界中に626、日本の大学には4つのCHAIRがあります。ユネスコは、申込書の選抜に基づいて、CHAIRに称号を与えます。UNESCO CHAIRは、ユネスコの権限の範囲内での特定の分野・領域で、現存する教育/研究プログラムを強化することによって、大学の学部内で発展しうるもので、また、国際的広がりを持たせてくれるものです。

これは、日本の大学の UNESCO CHAIR のリストです。

- ◆環境マネジメントとインフラの整備設計の UNESCO CHAIR (1997)、埼玉大学
- ◆造船工学と海洋土木の UNESCO CHAIR (1997)、広島大学
- ◆文化遺産と危機管理の UNESCO CHAIR (2006)、立命館大学、歴史都市防災研究センター、京都
- ◆持続可能な発展のための教育と研究の UNESCO CHAIR (2007)、岡山大学

(3) 持続可能な発展のための教育(ESD)

ユネスコプログラムにおける3番目の要素、持続可能な発展のための教育とASP ネット(ユネスコアソシエートスクールネットワーク)に移りましょう。ESDは、ユネスコの中でも、日本政府から強い支援を受け、優先順位の高いものの一つです。個々が持続可能な社会作りに参加できるように育成するためのものです。ESDは、私たちが将来、持続可能な社会を築けるようにするための新しい概念であり、環境、エネルギー、文化、経済、国際理解などの様々な分野を統合したものです。

ESD の更なる促進

ESD の宣伝と促進のために、これらのスキームが使われています。そして、私たちは、ユネスコアソシエートスクールネットワークが、最も重要なプロジェクト或いはモデルプロジェクトの実行の元で、日本において十分に持続可能なスキームであると考えています。

ESD 促進のための方法

ASP ネットの目的は、私たちは「ユネスコスクール」と呼んでいますが、ユネスコの原則に気づき、学校における実践的な応用を通じて、平和と国際協力の両方を促進するものです。国内では、学校間のネットワークの構築と情報交換を、地域では、地域の結束を強め、世界的には、情報交換を促進し、結束性を高めます。

主なテーマは、地球規模の問題を理解すること、国際理解教育、世



界遺産の教育、環境教育、人権に関する教育、民主制と寛容さなどです。

このテーマを通して、世界に向けてのネットワークの繋がりができていきます。

結論

結論として、政府や資金援助団体からの資金を活用し、このことに海外に張り巡らされた大学連携網に参加することは、日本の大学側にとっても非常に有益であると言えます。大学が学術的交流と国際化を進めることができ、その結果、大学がより活発になり、優秀な人的資源を通して地球規模での発展に寄与し、レベルの高い研究と社会やコミュニティと協力して活動を行なっていくことができます。

VI. 追加の情報

これは、ユネスコの活動の追加の情報です。ユネスコの活動は、国の政府、地方自治体、NGO 或いは政府に属さない個人によって行われています。宮崎には、5 つのユネスコの団体があります。それらは、非政府の団体ですので、もしも関心がおありでしたら、どうぞ連絡を取ってみてください。

宮崎のユネスコの協会

- ◆西都ユネスコ協会
- ◆日南ユネスコ協会
- ◆都城ユネスコ協会
- ◆高鍋ユネスコ協会
- ◆延岡ユネスコ協会



ご清聴ありがとうございました。このシンポジウムが実り多きものとなりますことを祈念して、プレゼンテーションを終わらせていただきます。

セッションⅡ： 学生の声

海外での学習経験と大学教育に対する提言

石黒 えみ

宮崎公立大学 学部学生

<トピック>

- 1、カナダでの経験について
- 2、母校、千種高校についてとカナダで働こうと決めた理由
- 3、現在の大学カリキュラムへの提案



<カナダでの経験>

私は宮崎公立大学に入学してから、カナダのバンクーバーで日本語教師として働くことを決意した。私が1年間働いていたJEC日本語学校は私立の日本語学校で、本校がバンクーバーに、分校がノース・バンクーバー、リッチモンド、コキットラム、ホワイトロックにある学校だ。ブリティッシュ・コロンビア州には、日本語学習者や、両親のどちらかが日本人という子供が近年ますます増えてきており、日本語教育が盛んである。しかし学習者の学習目的は実にさまざまで、趣味で勉強する人や、仕事上の都合の人、または資格試験や学校の補習のようにしてくる人もいる。

学習者の日本語のレベルがそれぞれに違うため、私は生徒に日本語と英語の両方で日本語を教えていた。そこではクラスは大人や高校生を対象とした個人のクラス、子供を対象とした普通科、基礎科のクラス、5歳児のクラスを担当していた。授業で様々な人と接するうちに、私は日本語教育そのものの面白さだけでなく、働くということの責任感も同時に感じていた。そしてそれ以上に、学生でいられるということがとてもありがたく、まだまだ学生として学ぶべきことがたくさんあると気づき、1年後、日本に帰ってくる決意をした。

<母校の千種高校についてとカナダで働こうと決めた理由>

私は、愛知県の県立高校で、2003年にSELHiに選ばれた、千種高等学校、国際教養科を卒業した。その国際教養科でも英語教育は普通科とのもとは異なっていて、国際教養科の生徒は、帰国子女や留学生と一緒に学習する。英語の教師もアメリカや南アフリカ共和国からの教師であった。授業もスピーチの仕方を習うパブリック・スピーキングや模擬国連、地域研究、第二外国語（フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、韓国語、イタリア語）など、ユニークなものがある。生徒たちはそれらを英語で勉強し、授業中には意見も求められる。それらの授業を通して、英語を学ぶだけでなく、英語で勉強することの大切さや、インプットだけでなく、アウトプットも同時に行う英語教育が非常に大切であると気づいた。しかしながら日本の学校はインプットや文法事項に重点を置きすぎる傾向にあり、残念ながら、私の大学でも英語を勉強する授業はたくさんあっても、英語で何かを勉強する授業はほとんどないのが現状である。そのため、当時大学1年だった私は英語で何かをやってみたいと思い、また、たくさんの日本人と一緒に語学学校で英語を勉強するために海外に行くのはあまり意味があることのように思えず、海外で働いてみようと思ったのだ。

<カリキュラムに対しての提案>

- 1、休学や復学がよりしやすいように制度を変える必要がある。
- 2、今以上に夏入学、夏卒業を取り入れる。
- 3、海外に提携校や姉妹校を増やし、より簡単に学生が海外経験を行えるようにする

<大学での英語教育に対しての提案>

- 1、英語で何かを勉強できる授業を増やす。
- 2、インプットだけでなく、アウトプットも同時に行う授業にする。
- 3、教科書や文法書重視の学習ではなく、人と人とのインタラクションやコミュニケーションをたくさん取り入れる。

PSU で学んだこと、交換留学プログラムの改善に向けて

山下 麻里絵

東京医科歯科大学 研修医

私が卒業後、医者として働き始めてからほぼ1年が経過しました。毎日が新しい発見の連続です。時には、自分の無力さを感じたり、そのために落ち込んだりもしました。しかし、今は自分の仕事をとても楽しんでます。

2008年のEMPプログラムの1部で、「教師」として活動する機会を得ることが出来ました。現在、日々の仕事の中で英語を話す機会はほとんどありませんし、将来こうやって英語を使って何かをすることなど考えてもいませんでした。EMPプログラムで活動したことは、自分の将来についてもう1度考える良い機会を与えてくれたと言えるでしょう。

私は、2007年4月にPSUへ行き、タイと日本では、医学の学び方にいくつかの違いがあることに気づきました。主な点は次の3つです。

・状況

私は、タイには十分な数の医者がいないと聞いていました。そのため、タイの医学生は処置に関わる機会を多く得ることができるよう。病棟業務も同じく、彼らにとっては重要な仕事です。整形外科病棟では、創傷包帯は学生達の仕事でした。また、Sichon 病院などの地域病院では、帝王切開や虫垂炎などの単純な手術の中心術者になるために、外部から通勤医師がやってきます。ここには“チームの一員”となるためのチャンスが多くあります。

・教育

先にも述べたように、私は2008年のEMPプログラムで教師となる機会を得ることができました。そして教えるということが、教わるということよりももっと難しいということに気づきました。PSUへ行ったとき、私は教育制度が非常に“強固”であると感じました。医者や研修医が通勤医師を教育し、先輩学生は後輩学生の面倒を見る。きっとこれは彼らを自分達のチームの一員として、注意深く見守っているからなのだとと言えるでしょう。

・責任

強固な教育システムによってサポートされていることにより、多くの機会が与えられますが、それは同時に“責任”の重さも増すということを意味します。チームの一員として彼らは、日本の学生よりも患者に対する責任と言うものを強く意識しているに違いないと私は考えます。

日本では、研修医は2年ごとに病棟を移ることが義務付けられています。このシステムの目的は、どの病棟にも対応できる万能医師の育成です。しかし、同時にこのシステムは、研修医を“ゲスト”として位置づけてしまう可能性があります。なぜなら、卒業までに自分の希望する病棟があったとしても、万能医師を育成するという名目のために、それぞれの部局を通過していかなければならないのです。

医者になってから1年が経ちました。前に述べた“ゲスト”研修医との信頼関係を築くのは難しいと言う医師は少なくありません。また、厳しく指導しすぎることにためらいを感じるという医師も多くいます。このように、与えられる機会が少なければ少ないほど、信頼関係の構築はより難しくなるのではないかと考えます。

今日、日本の医学教育制度は、チームの一員としてすぐに活動できる医師の育成するために、何が良いのかを模索する過渡期にあります。

EMPプログラムは新しい教育システムのモデルケースとなることができると確信しています。なぜならこのプログラムは、上記に挙げた3つのポイントを備えているからです。

私はこのプログラムが長く続けられ、そしてPSUとUOMの多くの学生が、このプログラムを通して何かを見つける機会を得てくれることを期待しています。



宮崎大学医学部で学んだこと、 交換留学プログラムの改善に向けて

Tharntip Sangwsuwan

プリンス・オブ・ソンクラ大学 研修医

こんにちは、みなさん。本日はこのシンポジウムで発言、また私が2年前にこちらで交換留学生として得た経験を皆さんと共有する機会をいただき本当に光栄です。

2007年8月、私はタイのプリンス・オブ・ソンクラ大学から交換留学生として宮崎に参りました。ここでの4週間は、大学病院内の様々なセクションの医療チームに合流させていただきました。私は手術室やOPDを見学し、病棟を回ったり、朝礼に参加したりなどしました。これらはとても貴重な経験となり、多くの忘れられない時間を過ごすことができました。

初日は、歓迎会を開いていただき、とても暖かく迎えてくださいました。この最初の出来事が私の気持ちや皆さんに対する印象をととても良いものにすることになりました。私達を迎えてくださった大学病院、医療チームの皆さん、そして学生の皆さんに感謝申し上げます。おかげ様で、外国にいながら、初日から家にいるかのように寛ぐことができました。最後の日の送別会で私は、皆さんに感謝の言葉を申し上げるとともに、必ず戻ってくると約束しました。私は約束を守ります。ですから今ここにいます。

滞在中に印象に残った事は何かと考えた時、それが数え切れない程多いということだけは容易に言えます。しかし、今日、その中から2, 3選ぶとすれば、この2年間を通してはっきりと私の心に残っていることを選びます。最初に挙げるのは、大学病院がすばらしく高い水準で運営されている点です。OPDは組織的かつ規則正しく運営されていました。決して詰め込みすぎたりしません。その結果、個々の患者の皆さんが行き届いた検査を受けることが出来ていました。それにもかかわらず、全てがスムーズかつ迅速に行われていました。患者の皆さんは、病院で提供されるサービスにとっても満足してように見えました。

大学における感染制御システムもまた、とても効率的でした。私が実際に見学したのは、手術室での処置でした。そこでは安全で無菌の状態を提供するために、全ての器具が使い捨てにされていました。大学病院で導入されている技術は、非常に先進的で質の高いものでした。ここで使われている技術の一部をタイでも使うことができるなら、タイの医療技術を前進させることができると私は考えます。



2番目に、これまでの滞在中に経験した印象深い出来事は、先生方や学生の皆さんがとてもよく私たちの面倒を見てくださったことにあります。皆さんが私達、タイからきた外国人と、意見交換をするためにとても熱心になってくださいました。朝礼では私達が理解できるようにいつも英語で進行してくださり、私達も議論に参加することができました。それ以外にも、学生の皆さんは、私達の滞在をより良いものにしようと、多くの時間を共に過ごしてくれました。授業や昼食、夕食も一緒に行動してくれました。学生の皆さんは、私の食事のことにも



(牛肉を食さない) 快く対応してくれました。これについても、深く感謝しています。

病院内でのサポート以外にも、学生の皆さんは、私達を街に連れて行ってくれたり、多くの観光名所に連れて行ってくれたりしました。医学生はいくつか日本語を教えてくれ、タイ語にも興味を示してくれました。また、私の母校 **PSU** (プリンス・オブ・ソンクラ大学) にも興味があるようで、多くの質問を受けました。学生の皆さんは、タイ南部が危険な状態にあるにも関わらず、**PSU** は安全だと思ってくださっているのでしょうか。近い将来、**PSU** を訪れてみたいと興味を示してくれました。

第3に、私に強い影響を与えてくれた、医療チームの皆さんに感謝の言葉を述べたいと思います。私が職務をこなす間、医療チームの皆さんはとても親切で、積極的にサポートしてくださいました。

ここでは、とてもよい思い出を数多く作ることができました。そのことから **PSU** と宮崎大学医学部の交流プログラムは、今後も続けるべきだと思っています。このプログラムは、タイと日本の医学生との間の知識及び文化の交流や、2校間のよりよい信頼関係の構築を促進しています。タイの文化、料理などを紹介する機会が得られたことで、日本の皆さんのタイに関する理解を進めることができました。私はまた、タイや自分の大学の良さを伝える大使として活動できたことを誇りに思っています。

最後にこちらを訪れてから、私はこのプログラムのために何かをしようと努力しました。翌年から交換留学生として派遣される学生に、私自身の経験を話したり、留学の準備を手伝ったりしました。また、**PSU** にきた日本人学生の受入れにも関わってきました。私が宮崎で感じた歓迎の気持ちを、彼らにも感じて欲しいと思っています。

最後に、もう一度、前回こちらの大学病院を訪問する機会を与えてくださったことに感謝の念を表します。また、今回このような席に招待してくださったことにも感謝申し上げます。ここで得られた思い出を、これからもずっと大切にしたいと思います。

ありがとうございました。



海外での学習経験と大学教育に対する提言

陶山 真由美

宮崎県立看護大学 学部学生

私たちの大学には、短期海外派遣支援プログラムというものがあります。この支援プログラムは、学生が大学での日々の学びの上に、学内で得ることの難しい新たな刺激を受け、その刺激を帰国後、皆で共有し、視野を広げ、前向きに未来へ進んでいくための1つの可能性を提供するために、2004年度より、開始されたプログラムです。海外で「こんなことに挑戦してみたい」「こんなことを学んでみたい」「未来への学びに向けて、こんなことを挑戦してみたい」と思っている夢を実現できるよう、実現可能性のある企画に対して、経済的支援を行うものです。そして、帰国後は、他学生と海外での学びを共有します。

私は、大学1年生の時に、英語海外研修というクラスを受講していました。このクラスは、海外でやってみたいことを自分で計画を立てて実行するというものです。海外に行くまえに、その国の歴史や文化を学びながら、英語などを学び、出発に備えます。私は、このクラスで、フィジーに行きました。フィジーでは、ホームステイをしながらいくつかの病院を見て回りました。ODAで建てられた病院も見学しました。そして、病院の看護師やスタッフ、JICA職員、ホストファミリーからフィジーの看護や病院のシステム、疾病の種類、文化など多くのことを聞くことができました。フィジーを見て回るうちに、次は、海外の先進国の現場について知りたいという強い思いが生まれました。しかし、私には、十分な資金がありませんでした。そこで私は、このプログラムに申し込み、そして、去年の3月にアメリカに行ってきました。

初め、私は、ロサンゼルスにある無料で医療行為を提供しているクリニックでのボランティアを計画していました。このクリニックは、無償でその地域に住む人たちに医療行為を提供しているクリニックでした。また、世界からボランティアを受け入れていました。私は、1年次にこのクリニックに連絡を取った際に、オッキーの返事を頂いていました。そして今回、再度、連絡を取ると、日本からのボランティアは、日本の会社を通してくれと言われました。そこで、クリニックから言われた日本の会社に連絡を取ると、高い料金を言われました。ボランティアをするのに、その料金は私には、高かったのです。私は、会社とクリニックに代替案を出しながら交渉したのですが、良い結果は得られませんでした。そこで、私はもう一度、自分は、何がしたいのかを考えました。



日本にいて、関東では、病院ボランティアについてよく耳にするけれど、宮崎にいて、病院ボランティアについて耳にすることが少ないと感じました。病院ボランティアは、宮崎でもこれから、もっと重要になってくるのではないかと考え、病院ボランティア協会が出版している雑誌から宮崎の病院ボランティ活動について調べてみると、宮崎での活動は、他県と比較すると少ないのが実情でした。そこで、ボランティについて学ぼうと決め、もう一度、情報を検索し、旅のプランを立てて、実行することとなりました。日本に戻る前に、カナダの病院ボランティアを行っている病院を訪問し見学しました。そして、日本に帰ってからは、日本における病院ボランティアの実際として、東京にある大学病院を訪問し、見学させていただきました。



初め、私は、アメリカのロサンゼルスに行きました。老人施設でのボランティアを2週間行いました。この老人施設は、日系人のための施設です。この地域には、30000 人もの日系人が生活しています。この施設は、24 時間の特殊なケアを慣れ親しんだ言語、食事をもって行い、お年寄りを敬い、この施設を終の棲家となるように日々、頑張っています。スタッフとボランティアは、日本の伝統的な文化、美術、音楽、体操など種類豊富な余暇活動を提供しています。この施設には、100 人を超えるボランティアの登録があります。ボランティアは、福祉文化部に所属します。

ボランティアの仕事は、多岐にわたります。福祉文化部門の活動は、献身的なボランティアスタッフによって支えられているといっても過言ではありません。ボランティアスタッフも施設の入居者のために、良いものにしたという思いは、共通でした。

私は、ここでのボランティア活動に参加して多くのことを学ぶことができました。特に3つのことを学びました。1つ目に、多くのスタッフやボランティアが居住者とその家族のために最善を尽くして働いているということです。2つ目に、居住者は、毎日のアクティビティ活動をとても楽しんでということです。特に食事や、余暇活動です。毎日の余暇活動は、居住者の健康のためにとても必要で重要なものだと感じました。居住者の方々は、とても優しく、1人1人、それぞれがとても魅力的でした。3つ目に、各々の居住者の方は、それぞれにここに至るまでの生活過程があるということです。その生活過程は、個別的でありながら、人々に共通のものであるということです。だからこそ、私たちは、居住者を尊重し、病気であろうとなかろうと居住者の思いを尊重することが大切だと感じました。居住者の声をよく聴き、その方が声を出せないとしても、その日の体調や行動、反応を身長に観察することはとても大切だと感じました。

私たちは、先入観を持つことなく、目の前にいる方を見ることは、その方と良い関係を築く上でも、また、その方をよりよく理解し、ケアを提供する上でも大切なことだと感じました。私は、人間は、先入観をもってしまい、それにとても影響されやすい存在と考えます。もし、私たちが先入観を持って居住者と話をするとしたら、私たちは、本当に理解しあうことはできないと考えます。もし、私たちが、本当に理解しあえないとするならば、居住者が本当に必要としていることを満たすことはできないと考えます。これらは、大学での日々の学びのもとに感じられていることです。

私は、去年の夏に、居住者やスタッフにもう一度会いに、この施設を訪問し、ボランティア活動を行いました。このプログラムを通して体験したことは、この瞬間で終わるのではなく、これからの私の人生においてずっと続いて行くものだと考えます。私は、未来に期待するだけでなく、過去を振り返るだけでなく、今を輝かせていくことの大切さを改めて感じることができました。これからの人生に活かして行きたいと思います。



昼食





学術協定調印式



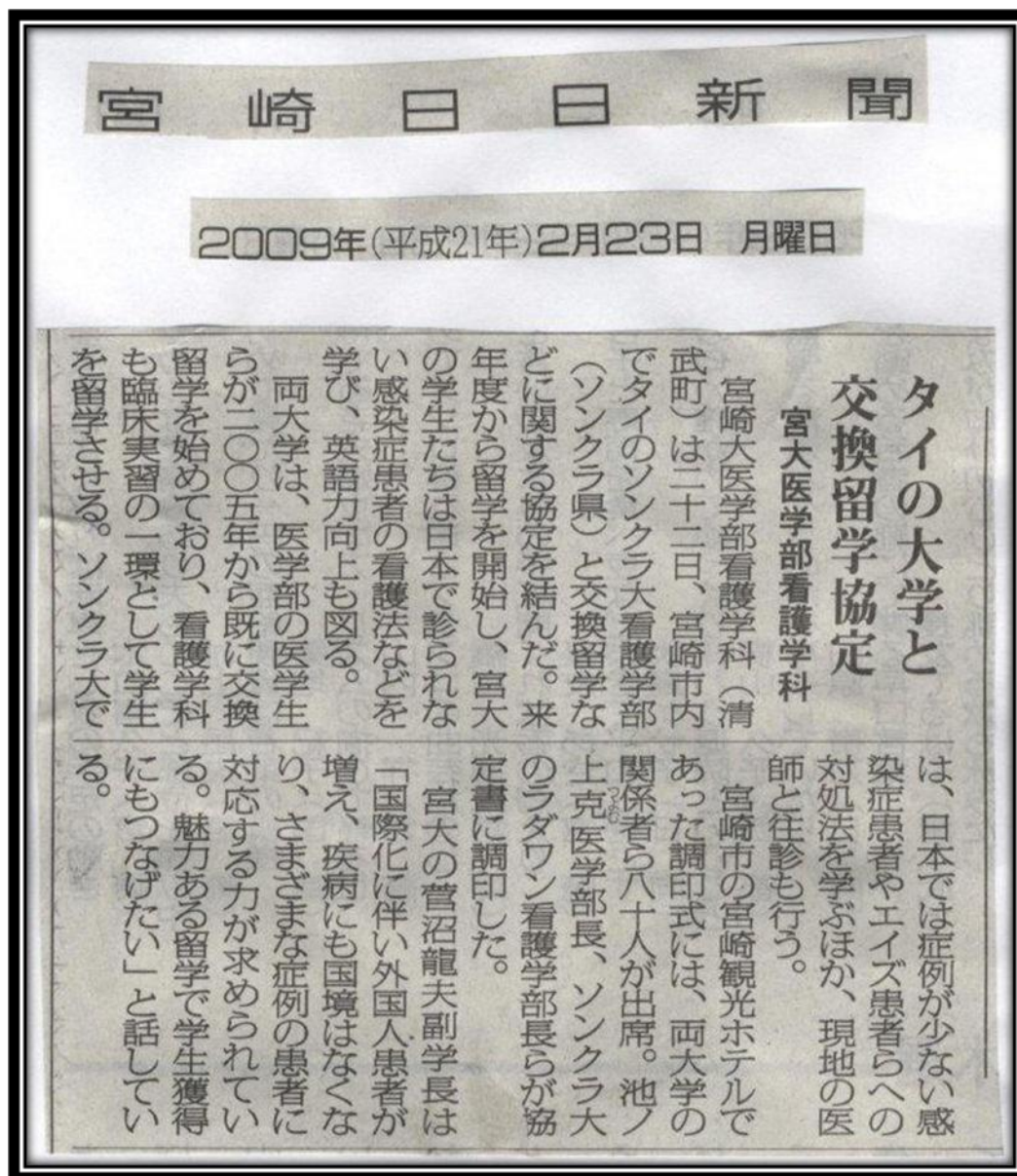
レセプション





翌日、タイ日合同シンポジウムが地元新聞で紹介されました。

(宮崎日日新聞)



シンポジウム参加者名簿

海外提携校を活用した専門家育成のための大学教育

—タイ日合同シンポジウム—

平成 21 年 2 月 22 日（日）

宮崎観光ホテル 尾鈴の間（西館 8 階）

学外

1	文部科学省	清水 宣彦
2	東京医科歯科大学研修医	山下 麻里絵
3	宮崎公立大学	Hugh Nicoll
4	宮崎公立大学	石黒 えみ
5	宮崎公立大学	竹ノ内 佳子
6	宮崎県立看護大学	Eric Larson
7	宮崎県立看護大学	陶山 真由美
8	宮崎県立看護大学	小笠原 広実
9	宮崎県立看護大学	白坂 佳代
10	宮崎県立看護大学	川北 直子
11	プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部	Suvina Ratanachaiyavong
12	プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部	Sunton Wongsiri
13	プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部	Maliwan Oofuvong
14	プリンス・オブ・ソンクラ大学医学部	Tharntip Sangsuwan
15	プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部	Ladawan Prateepchaikul
16	プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部	Urai Hatthakit
17	プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部	Wongchan Petpichetchien
18	プリンス・オブ・ソンクラ大学病院看護部	Somamai Sutheerasanti
19	カリフォルニア大学アーバイン校医学部	Lawrence H. Gold

学内

20	副学長	菅沼 龍夫
21	医学部長	池ノ上 克
22	医学部副学部長	片岡 寛章
23	医学部副学部長	丸山 眞杉
24	医学教育改革推進センター	林 克裕
25	寄生虫学分野	丸山 治彦
26	フロンティア科学実験総合センター	加藤 丈司
27	産婦人科学分野	鮫島 浩
28	英語学分野	玉田 吉行
29	英語学分野	横山 彰三
30	英語学分野	マイケル・ゲスト
31	英語学分野	リチャード・ホワイト
32	英語学分野	南部 みゆき
33	看護学科	草場 ヒフミ
34	看護学科	兵頭 慶子
35	看護学科	土屋 八千代
36	看護学科	大川 百合子
37	看護学科	山田 美幸
38	看護学科	吉田 希美
39	看護学科	内田 倫子
40	看護学科	緒方 昭子
41	看護学科	矢野 朋美
42	看護学科	野間口 千香穂
43	看護学科	水畑 喜代子
44	看護学科	永瀬 つや子
45	看護学科	小嶋 理恵子
46	看護学科	藤井 加那子
47	看護学科	鶴田 来美
48	看護学科	蒲原 真澄
49	看護学科	長谷川 珠代
50	看護学科	村方 多鶴子
51	看護学科	塩満 智子
52	附属病院看護部	日高 真美子
53	附属病院看護部	久保 敦子
54	附属病院看護部	福満 美和
55	附属病院看護部	上原 美奈子
56	附属病院看護部	佐藤 恵美
57	附属病院研修医	越智 清純
58	医学科5年	石井 信之

59	医学科 5 年	金井 瑞恵
60	医学科 5 年	眞川 昌大
61	医学科 5 年	田中 暁子
62	医学科 5 年	長縄 郁絵
63	医学科 5 年	成田 健太郎
64	医学科 5 年	林 直子
65	医学科 5 年	和田 あかり
66	医学科 4 年	猪川 文朗
67	医学科 4 年	石井 怜子
68	医学科 4 年	篠田 千佳
69	医学科 4 年	篠原 正尚
70	医学科 4 年	白崎 幸枝
71	医学科 4 年	名越 怜子
72	医学科 4 年	松島 綾子
73	医学科 4 年	望月 直矢
74	医学科 4 年	山田 啓太
75	医学科 4 年	別所 和典
76	看護学科 3 年	齊木 麻乃
77	看護学科 3 年	溝口 春香
78	看護学科 3 年	吉田 望美
79	学術研究協力部	水井 義武
80	医学部総務課	小野 潔
81	医学部総務課	龍元 裕貴
82	医学部総務課	鮫島 浩一
83	医学部総務課	橋本 徳之
84	医学部総務課	石川 沙希
85	医学部学務課	原田 隆治
86	医学部学務課	河野 幸男
87	医学部学務課	小崎 和哉
88	医学部学務課	名城 さおり

あとがき

英語学分野 玉田吉行

参加した学生は「いいシンポジウムでした」と満足そうでした。結果おーらいです。

元々大学は学生のためにあるのですから、「中期目標を達成するために」とか、「また外部資金が取れるように文部科学省の人に来てもらおう」とか、「出席者が少ないといけないから学務の人にも動員を頼もう」とか、そんな大学の苦心とは無縁です。

学生が心を動かされたのは、EMPでもセッションを担当して下さった産婦人科医の鮫島さんやタイの医師サントンさんや～さんや～さんが、学生交換の骨子となる臨床実習での医師の気持ちを率直に語ったからです。また、ソクラ大学との学生交換開始に尽力された医学部長の池ノ上さんや国際交流委員長の丸山さん、カリキュラムの面を支えた副学長の菅沼さんや医療教育改革推進センターの林さんや教務委員長の片岡さん、学部の要請を受けて臨床実習で学生が自信を持って英語が話せるようにと始めたEMP講座を担当している英語分野のゲストさん（実際に直接学生のために尽力されている人たち）が、それぞれの立場から率直に心情を語ったからでもあります。

そして何よりも、今回の主役である留学を経験した人たちの話が、聞いている人の心に響いたからです。公立大の石黒さんはカナダでの体験から今の大学の教育制度に一番欠けている点を鋭く指摘し、双方向の心の通う教育の大切さを語りました。看護大の須山さんは～必要性を語りました。そして最後に、研修医の（通称Be）さんと山下さんは、以前は学生として、今回は医師・講師としてEMPに参加した経験から得た人と人の繋がりやの尊さをまっすぐに伝えました。「先に経験した人がより若い人たちに教えるというのは大切だと思います。」という山下さんの言葉は、短期間にたくさんの科を回る制度の中で人間関係が希薄になっている今の2年間の卒後研修を受けている側からの鋭い提言でもあり、EMPの将来の大きな目標・課題でもあります。

タイとの学生交換を始めたのはわずか4年前ですが、今回のシンポジウムでは予想以上の成果がありました。今後、内容がますます充実して、今以上に学生に還元されて行けば嬉しい限りです。

イチローが泊まって部屋は一杯だったという日曜日の宮崎観光ホテルでシンポジウムが開催出来たのは、仏滅を嫌う日本の慣習のおかげです。また、学生がレセプションパーティーで豪華な食事を楽しめたのも、中期目標を達成しようとした大学と、そんな制度を考え出した文部科学省のおかげです。シンポジウムとEMPに国内外からたくさんの講師を招聘できたのも、今回採択された文部科学省の平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム」のおかげです。いやはやです。

日本人とタイの人たちが英語でシンポジウムを開催するというのも考えてみればおかしい話ですが、シンポジウムは予想を大きく覆しての80人の大盛況でした。結果おーらいです。委員長の丸山さん、ご苦労さまでした。

学務の方々、日曜日にもかかわらず本当にありがとうございました。観光ホテルとの交渉をすべてやって下さった総務課の鮫島さんには、改めて御礼を申し上げます。

たま

2009年3月11日（仏滅）



2009 年 3 月末作成